

壁を突き破れ



mikatuki98

「今日は何センチほど跳びますかね？」

誰かの声で吾にかえると、既に地に足がついていなかった。

そう言えば問われた時に、30センチくらい跳び上がっている自分の姿が思い浮かんだっけ。

しかしそんな念も電光石火のことで、1秒にも満たない、時間と言うにも余りに短い瞬間だった。

ん？ 待てよ。

誰かの声はが「今日は？」と言ってたということは、毎日跳んでいるということなのか？

自覚のないままに毎日跳んでいるとなると、その目的は一体何なんだ？

そんなことを考えている間も、本当は僅か数秒にも満たなかったのだろう。

今度は自分の身体が完全に空を飛んでいた。

しかもただ浮いているという感覚ではなく、ある程度の高さを保ちつつ移動しているのだ。

「ヤッホ〜〜♪」

無意識に大声を上げた自分に赤面しつつ、飛行はどんどんと加速していく。

「どんなもんだい！」

勝手に言葉が飛び出してくる。

「わはははは 愉快だ愉快だ こりゃたまらん」

スピードに比例するように自分の中の感情がヒートしていく。

「こうなったら空の果てまで移動して世界の壁を突き破るぞ〜〜〜！」

朝、目覚めたボクは、オンボロのアパートの薄いベニア板を突き破り、隣の部屋に頭だけ出していた。

幸いにも隣の住人はすでに外出。

そう言えば、隣の住人が引っ越してきてから毎晩のように古いアニメソングが流れていたんだ。

「クソ〜〜 毎晩毎晩、鉄腕アトムなんか聴きやがって……」

突き破った壁の修理代を大家に請求されるかと思ったら、更に腹が立ってきた。

「今月も金欠でいよいよピンチなんだぞ！」

現実を忘れる為に、ドラゴンボールZの主題歌を大音量で流してやった。

もちろん、一番聴かせてやりたい隣室の主は居ない。

「どうだ！ ザマ〜ミロ！」

ベジータのように毛を逆立てて叫んだ。

その夜、再び夢の中で飛んでいた自分は、誰かが放ったカメハメ波にやられ全身が吹き飛んだ。

そして翌朝目覚めると、今度は反対隣の壁を突き破っていた。

嗚呼〜無惨！ 了